

言語社会研究科 博士論文要旨

著 者 矢野 順子
論文題目 ラオスの国民形成と言語ナショナリズム
—植民地時代から社会主義革命まで (1893-1975年)
学位取得年月日 2009年11月11日

本論文は、植民地時代以降、ラーオ語がラオスの国民語として形成されていく過程が、ラオスの国民形成にどのように関わるものであったのか、明らかにすることを目的とするものである。

一般に、言語が国民形成に果たす役割としては、コミュニケーション手段としての媒介能力と、国民がその言語を共有することに何か特別な価値を見出すような、国民統合の象徴としてのシンボリックな機能の二つが挙げられる。そしてこの二つの見方を橋渡しするようなナショナリズム論に、ベネディクト・アンダーソン(Benedict Anderson)の「想像の共同体」論がある。かつてカール・ドイッチュ(Karl Deutsch)は、現実におこなわれる「社会的コミュニケーション」に国民形成の基礎を見出した。これに対してアンダーソンは、出版資本主義の発展による共通の出版語の普及が、見ず知らずの読者の間に「想像上のコミュニケーション」の場を提供し、国民という「想像の共同体」の出現が可能となったのだとする。しかしアンダーソンもまた、言語を国民の表象とするような見方については「常に間違いである」と退け、国民の想像に際して、出版語が「何語であるか」は問題ではないとする。

言語の排他性を否定し、包括性に注目したアンダーソンのモデルは、ラテンアメリカやアフリカ諸国など、言語が争点とならなかったナショナリズムのケースを論じるには有効であり、また出版語の流通が、国民形成にあたって重要な役割を果たしてきたことは、もはや否定することはできない。しかし一方で、包括性を過度に強調することは、国民語の「境界」が生成される過程において、シンボリックな機能が果たす役割を過小評価することにもなりかねない。例えばアンダーソンのモデルでは、ラオスにおけるタイ語出版物の流通は、ラーオ語出版物を上回るほどであったにもかかわらず、タイ語は「ラオス国民」を想像する媒体とはなりえなかった、という事実をうまく説明することができない。ラオスにおいて、タイ語が「ラオス国民」の形成になんらかの役割を果たしたとすれば、人びとがタイ語との区別をとおして、ラーオ語、ラオス国民を想像するという、「否定的同一化」の媒体として機能していたということであり、このことはまた、旧宗主国語であるフランス語についても同様である。ラオスの歴史をみると、タイ語、フランス語からのラーオ語の言語的独立は、つねに第一の課題として掲げられてきており、タイ語やフランス語の使用には、強い抵抗が存在した。これは「ラーオ語」に「ラオス国民」の政治的独立の象徴としての役割を求めた、強い言語ナショナリズムによるものにほかならず、このことは正書法や語彙の整備など、言語のコミュニケーション機能に関わる領域にも

影響を及ぼしてきた。

以上を踏まえたうえで、植民地時代、王国政府、パテート・ラーオのそれぞれにおける言語ナショナリズムの展開を、植民地時代に関してはタイ語、王国政府とパテート・ラーオにおいては、タイ語とフランス語からの言語的独立を求める動きとしてとらえ、考察をおこなった。論文の構成としては、第1章で先行研究を検討、第2章で歴史的背景を述べた後、第3章から5章で植民地時代、王国政府、パテート・ラーオの順に検討した。そして考察の結果、以下のようなことが明らかとなった。

1) フランス植民地時代

19世紀末より、植民地化を円滑に進めるため、フランス人によって辞書など一連のラーオ語出版物が編纂され、そのなかで、タイ語に対してラーオ語を下位におく、言語の「序列」が形成されていった。フランスは、タイ語は文字の増補や声調符号を付すなどして発展を遂げてきたのに対し、ラーオ語は原初の姿のままにとどまっているとして、ラーオ文字の劣なさ、書記言語としての未整備を、ラーオ語をタイ語の下位におく根拠として挙げた。そしてこのような、ラーオ語の「衰退」の要因を、ラーオ族の諸王国がシャムの支配下におかれていたという、植民地化以前の「歴史」に求め、「旧支配者」であるシャムの脅威からラオスを守る「保護者」として、ラーオ語の復興・再建に乗り出していく。ここに、タイ語からのラーオ語の言語的独立という、現在に至るまでのラーオ語形成の基本方針が誕生することになる。

フランスが、ラーオ語の近代語化を進めるにあたって第一に着手したのは、ラーオ語の正書法を確立し、ラーオ語をタイ語とは異なる「言語」として、つくりあげていくことであった。植民地時代をとおして、ラーオ語正書法には教育的バックグラウンドの相違を背景に、語源型、音韻型、ローマ字化という3つの意見が出され、この対立が解消されることはなかった。しかしながらいずれの立場も、ラーオ語のタイ語からの言語的独立をはかろうとした点で一致していた。

タイ語からの「独立」という枠組みは、タイの失地回復要求を退け、安定した植民地支配を進めようとしたフランスによって編み出されたものであり、その意味で、植民地時代のラーオ人の言語ナショナリズムは、フランスによって仕組まれた、反タイ語・ナショナリズム的色彩の濃いものであった。しかし一方で、音韻型の支持者が発音どおりに綴る方法に進歩性を見出し、ラーオ語とタイ語の序列を逆転させたことに表れているように、議論の進展とともに、ラーオ人の言語ナショナリズムは、次第に「保護者フランス」のもとを離れ、一人歩きを始めるようになる。そして音韻型支持が優勢となるなか、文字の劣なさ=合理性=進歩という認識から、タイ語に対するラーオ語の優位を確立するような言説が形成されていく。

このようにフランスの植民地下、タイ語との区別をとおして、ラーオ語の「姿」を実体化するという、否定的同一化による国民語形成の基礎が構築されていった。こうした動きは第二次世界大戦後、王国政府、パテート・ラーオの双方へと継承されていくことになる。

2) 王国政府

王国政府においては、植民地時代末期に音韻型が優位となった流れを引き継ぐかたちで、1949年の国王令によって、「発音どおりに綴る」というラーオ語正書法の原則が決定された。そして1953年に設置されたラオス文学委員会のもと、音韻型をベースにラーオ語正書法の規範が定められていく。

1953年にフランスからの完全独立を達成するなか、タイ語の脅威からラーオ語を守る「保護者フランス」という構図は完全に破綻し、シャム・フランスのもとに衰退を余儀なくされたラーオ語の、「我々ラオス国民」による復興・発展が謳われるようになる。そしてイデオロギー面において、ラーオ語はタイ(Tai)系諸民族語の祖語であり、ラーオ族はタイ系諸民族の起源であるという、ラーオ語、ラオス国民の「偉大な過去」をつくりあげ、現実のタイ語の脅威に対抗しようとした。

一方、独立後もフランス語が公用語として残り、中等教育以上の教授言語はファー・グム学校を除き、すべてフランス語が採用されていたという事実は、フランス語のもとに、ラーオ語が「下位言語」としておかれるという事態を招き、国民語としてのラーオ語の前途に暗い影を落とすこととなった。とりわけ教育におけるフランス語への依存は、中等学校進学時の不公平という、世俗教育における不平等とともに、仏教教育修了者と世俗教育修了者のあいだに亀裂を生じさせ、国民統合を阻害する大きな要因となっていた。そして世俗/仏教の対立を背景に、音韻型/語源型という正書法を巡る対立が解消されないまま、タイ語の影響は仏教教育の教材だけではなく、映画やラジオなどの新しい娯楽をとおして、圧倒的な勢いでラオスへと流入し、人びとの日常の言語生活に影響を及ぼすようになっていた。

しかしこのようなラーオ語をめぐる混乱が、王国政府の人びとのあいだに、次第にフランス語の追放とタイ語の影響からラオスを守り、ラーオ語を真の国民語としていこうという、言語ナショナリズムを醸成させていくことになる。『サート・ラーオ』には、タイ語語彙の流入に対する懸念や、政府のフランス語重視への反感を表明した、一般の読者からの投書が頻繁に届き、このことは広範な人びとが、タイ語とフランス語の脅威に直面するなかで、ラーオ語を国民語として認識するという、否定的同一化の過程に取り込まれるようになっていたことを意味していた。そしてこうした人びとの言語ナショナリズムは、やがて表向きはアカデミーを設置し、ラーオ語の復興を謳う一方で、現実の公務においてはフランス語を使い続ける王国政府エリート政治家たちへの不満となって現れ、パテート・ラーオへと合流していくことになっていった。

3) パテート・ラーオ

メコン川流域の都市部を支配領域とする王国政府と異なり、パテート・ラーオにおいては、ラーオ族主体の国民統合にいかにか少数民族を取り込み、多民族からなる「ラオス国民」をつくりあげていくかが、革命闘争を勝利へ導くための、第一の課題となった。そのため、パテート・ラーオの言語政策は、諸民族の共通語としてのラーオ語の形成・普及と「少数」民族語の発展の二大方針のもとにすすめられることとなる。

もっとも王国政府においても、初等教育段階で少数民族の母語による教育を実施する可能性

に言及したり、少数民族地域に学校を建設したりする試みも見られた。しかし教科書の記述などから判断しても、王国政府の少数民族への関心はパテート・ラーオと比べて、低いものであったといえる。そしてこうした差異は、パテート・ラーオがつくったラーオ語の「歴史」と王国政府のそれとの違いにもあらわれていた。

先にみたように、王国政府においてはラーオ語がタイ系民族の祖語であるという、ラーオ族を中心としたタイ系諸民族中心のラーオ語の「歴史」が形成され、それ以外の少数民族を通時的に「ラオス国民」に統合しようという努力はみられなかった。これに対してパテート・ラーオでは、ラーオ語の復興を外圧の侵略から戦ってきたという「愛国者の歴史」と結びつけることで、きわめて曖昧に、ラーオ語の継承者のなかに少数民族を取り込む工夫がなされていた。そして「国民・大衆・科学」の3原則のもと、ラーオ語は多様な人びとを後進状態から救い出し、進歩的な生活へと導く「武器」であるとして、ラーオ語による教育制度の整備がすすめられていく。

パテート・ラーオでは、全レベルの教授言語をラーオ語とする政策がとられ、語彙と正書法を中心に、ラーオ語の整備がすすめられていった。ここでは外国の影響、すなわちタイ語とフランス語の影響を排除したラーオ語正書法の確立が目指され、ラーオ語の外国語からの「解放」は現在、民族解放闘争の名のもとに王国政府、アメリカとの闘争を繰り広げているパテート・ラーオの勝利を象徴的に示すものとされていった。しかし『ラーオ語文法』の前書きで、ラーオ語を「国民的・大衆的・科学的・進歩的」なものとするのが述べられているように、パテート・ラーオにおいて音韻型正書法は、ただ起源への回帰ということではなく、「進歩的」なものであると考えられた。プーミーが、1940年代の正書法会議に参加していたことを考えれば、王国政府と同様、ここにも植民地時代の議論からの連続性が見出される。そして識字運動や学校建設など、解放区での教育が拡大するにつれ、ラーオ語は多様な人びとの間に、パテート・ラーオの政治イデオロギーを浸透させ、ラーオ族軸の「ラオス国民」を建設していくための唯一の「武器」となっていった。

一方、パテート・ラーオは王国政府の支配領域においても、秘密裏に宣伝活動を実施し、その際、解放区でラーオ語による教育がおこなわれているということ、それ自体が格好の宣伝材料となっていた。パテート・ラーオでは、王国政府の教育制度を「奴隸的・植民地的」として非難し、解放区の教育の「国民的特徴」を強調した。中等教育以上のフランス語への依存など、王国政府のフランス語重視に不満を募らせていた王国政府の人びとにとって、「国民的特徴」を掲げたパテート・ラーオのプロパガンダは魅力的にうつたのであろう。現実には、教育内容やレベルに大きな差異が存在したにもかかわらず、学生たちを中心に、パテート・ラーオの支持者は確実に増加し、体制変換へのひとつの原動力となっていった。しかしパテート・ラーオが統制を強めるなか、そうした人びとの熱狂が、最終的には裏切られる結果となる。

以上の本論の分析からは、タイ語とフランス語という、二つの言語の存在が、否定的同一化というかたちをとって、ラーオ語の形成、そしてそれと同時に、「ラオス国民」意識の醸成を促進していった、ということが明らかとなった。言語は排斥の手段ではない、というアンダーソンの言葉は正しい。しかし包摂的であるがゆえに、ラオスの領域へと流れ込んだタイ語が、何の摩擦も引き起こすことなく、そのまま「ラオス国民」想像の媒体となったわけではなかった。

本論で検討した、正書法や語彙に関するさまざまな議論からは、タイ語との接触をとおして、ラーオ語の存在を認識し、植民地支配によってつくられた「ラオス」の領域を、ナショナルなものとしてみなしていくという、否定的同一化のプロセスが、国民形成の重要な契機となっていたことがわかる。さらにフランス語の存在もまた、教授言語や公用語など、主として言語のステータスに関わる領域から、ラオス人の言語ナショナリズムを刺激し、否定的同一化を促進する要因となっていた。そしてこの背景には、言語に国民の表象性を求める、強い言語ナショナリズムが存在したということができる。

ラオスの内戦は、結果としてこのような言語ナショナリズムの展開を巧みに利用した、パテート・ラーオの勝利に終わることとなった。もっとも、ここではこのことが、パテート・ラーオ勝利の直接の原因となった、などというつもりはない。しかしいずれにせよ、本論で考察したラオスの事例は、国民の想像に際して、その媒体となる言語が決して「何語でもよい」というわけにはいかないケースが存在することをはっきりと示している。そしてまた、今日グローバル化が進み、「英語帝国主義」という言葉が聞かれるようになる一方で、世界各地で地域言語の擁護や復興を求める動きが頻発しているという事実は、ラオスのケースが決して特殊なものではない、ということの意味している。